

『半世紀前の北国の学生生活』

理事 栢原英郎

今年の夏、私は半世紀以上前へのタイムスリップを経験した。20年以上前に亡くなった母の遺品の中から、大学時代に私から母宛に出した手紙の束が出てきたからである。

私が小学校1年の時に父が病没し、その後は母の出身地である東京で過ごしたが、大学進学に当たっては北海道大学を選んだ。大学の4年間は奨学金とアルバイトと家からの仕送りで過ごしたのだが、「仕送りを受けている以上、月毎に報告をしなさい」という母親の指示に素直に従って、月毎に収支を報告した。出てきたのはその手紙である。全てが残されていたわけではないが、それでも53通もあった。そこで手紙の一部を引用しながら、半世紀以上も前の北国の学生生活を紹介してみたい。



【1960（昭和35）年】

〈4月24日〉 「電報でお知らせしたとおり、無事に入寮が認められました。入寮枠3人でしたので、合格を知ったときには本当にホッとしました。」

大学生生活の最初の3年間は「汝羊（じょよう）寮」で過ごした。内村鑑三や新渡戸稲造、廣井勇などから始まった「（農学校）基督教青年会」が建てたもので、初代建物は1908（明治41）年に「農科大学基督教青年会寄宿舎」として完成。1940（昭和15）年に建て替えた時に、北大の初代総長であった佐藤昌介が旧約聖書詩篇100編に基づいて命名した青年会の名前「汝羊会」から「汝羊寮」となった。一人での思考を重んじるという精神から、個室を中心とした総勢16名の木造二階建ての小ぶりの寮であった。

〈5月25日〉 「札幌は今、桜の花盛りで、そのほかこぶし、タンポポ等の花が実にきれいです。雪国だけに春を迎える様々な催しが盛んで、5月の末にはライラック祭り、その後スズラン祭り、夏祭りと続きます。」



入学の日（古河講堂の前で）

5月に入ると一斉に花が咲き始める。キャンパスの中の巨大な榆の木の緑も日増しに濃くなる。1年生の講義は、明治42年竣工の木造二階建ての「古河講堂」で行われた。窓の外には、誰が繫いだのかいつも羊が1、2頭、草を食んでいて、時折のんびりした鳴き声をたてていた。夏が近づくとカッコーの声も教室に聞こえてきた。

〈7月10日〉 「今日で前期の授業が終わりました。あとはいくつかの講義の補習があり、その後19日に札幌をたちます。8時50分札幌発急行「スズラン」-13時53分函館着-14時30分函館出港-19時10分青森到着-19時30分青森発急行「北上」-20日9時5分上野着の予定です。」

札幌～東京間は24時間15分もかかっている。特急列車もあったようだが「学生の分際で」乗るものではなかった。

〈9月7日〉 「一日汽車に揺られて札幌に降りてみたら、空の色も、風も、キラキラ光っているのに温かみの少ない太陽も、スイスイ飛ぶ赤とんぼも、全てが秋のものです。」

東京で夏を過ごして札幌に帰って経験したのが、明るいが弱々しい太陽の光であった。北欧の物語にしばしば登場する「力を失っていく太陽」という言葉が思い起こされ、せきたてられるような気持ちになったことを記憶している。

【1961(昭和36)年】

〈6月6日〉 「書留昨日いただきました。5月は何の不足も無く過ごせたのですから、心配して下さらなくても良かったのです。でも夏の旅行の資金として感謝しています。」

2年生の夏休みの帰省では、大阪出身の寮の仲間と歩いて函館まで出ることにした。

札幌を発って中山峠を越え、洞爺湖～豊浦～長万部～八雲～森を経由して、ある時は自衛隊のジープが拾ってくれ、ある時は空の観光バスから「乗っていきなさいよ」と声をかけられたが、約280kmの道を8日間かけて歩いた。野宿も覚悟して、寝袋、コメ、味噌などを大型リュックに背負っていたが、人情豊かな時代で、教会、小学校、先輩の実家などに泊めていただき、野宿をすることはなかった。

噴火湾沿いの国道5号線は舗装されておらず、車にも出会わなかった。「真っ青な海-白い砂浜-ハマナスの咲き乱れる草地-国道-緩やかに折り重なる丘陵」という、同じような断面の光景が一日中続いた。函館に着き、函館山に登り、啄木の化粧箱入りの詩集「一握の砂」を一冊買って記念とし、旅を終えた。



「支笏洞爺国立公園」の看板の前で記念写真

〈9月28日〉 「25日に学科毎の募集人員と応募できる成績のランクが発表され、昨日の昼までに第1、第2志望の学科に出願しました。第1志望は土木工学科（募集35人）、第2志望は、土木以外は行かないという覚悟で、土木と同じように毎年第1志望者で満杯になる機械工学科（同40人）としました。10月2日に発表になります。」

「医類」「文類」「理類」という大雑把

な区分で入学している学生にとって、最大の関心事は専攻する学科の決定である。それには教養課程の成績が影響する。成績の上位ランクの学生に第1次応募の権利があり、かつ学科ごとに提示される成績レベルに達していないと、出願できない仕組みであった。農学部に行こうと思って北大に行ったのだが、北方領土を失ったこともあって農学部は沈滞した雰囲気があって、工学部の土木工学科に進むこととした。伯父は祖父が起こした海洋土木工事の会社も経営しており、小学生の頃から土木工事の話が聞かされてきたことが大きい。

【1962(昭和37)年】

〈2月13日〉 「先週土曜日午後は、寮の仲間と2週間ぶりに藻岩山に滑りに行きました、電停から15分ほど登ると、標高は百メートルほどですが左手はるかに石狩湾が黒く光り、正面から右手にかけて雪の大雪山連峰が眺められます。…帰りは四丁目で市電を降りて、大通り公園で繰り広げられている雪祭りの雪像群を見てきました。…北海道は冬に限ります。」

市電や市バスの往復でスキーが楽しめるとはなんとという贅沢だろう。

〈3月14日〉 「書留いただきました。現在次のような状況です。通帳に6,069円。手元に2,256円。これから必要なのは3月分外食費1,000円。次年度前期の授業料4,500円ですから、計画通りうまく行きます。」

学生時代の月々の平均的な収入は、家庭教師2,500円、日本育英会奨学金3,000円、ある企業系の財団の奨学金6,000円。不足しそうなときにはこれに仕送りが加わった。ここから寮費4,800円はじめ全ての必要経費をまかなった。当時国立大学の授業料は年間9,000円であった。2年後の私の初任給は19,800円であったから、学費はその半分以下である。

〈4月10日〉 〈無事、札幌に到着。札幌は随分暖かくなっています。4月に入って駅の屋上のオルゴールが「都ぞ弥生」になって、札幌に着く新入生を迎えています。明日は入学式です。しかし、情けないことに、なんと親の付き添いが多いことか。〉

当時でも、札幌に他の大学が無かったわけではないのに、駅のオルゴール（時報）が北大の寮歌となっても誰からも苦情が来ない。おおらかな時代だった。

〈6月11日〉 「来週から、市の西の山すそにある円山動物園で平板測量の実習です。例年大学の構内で行っていたのですが、市から依頼されて動物園の改修工事に必要な精密な測量図を作ることになりました。」

市からは学生に対しての感謝として、閉園後の動物園の中でジンギスカンパーティーが行われた。動物園らしく、肉も野菜も大きなバケツに入っていた。夕暮れ時の動物園は、彼らが猛獣であることを再認識させるほえ声が響き渡り、迫力がある。

〈11月29日〉 「長靴に穴が開いたので買い換えたりしたために、今月もピンチです。仲間も同じなのか、土木工学科の仲間の中で10時から16時までの間に20円以上の食費を使わないという我慢くらべが行われているので、この競争に参加することとしました。20円で食べられるのはそばかうどんなので、のぼすには最適です。」

この時に限らず、収支報告に「そば18円」という記録が10日間以上続く月が何回もある。ちょっと余裕のある時は「33円のカレーライス+12円の卵」の昼食だった。学食には贅沢メニューとして「酢豚ライス」もあったが、正直に「酢豚風ライス」と書いてあった。つまり味付けだけが酢豚で、豚肉は入っていない。

【1963(昭和38)年】

〈9月初旬（封筒が無く、月日が特定できない）。公務員試験の二次審査、面接を受けた日の手紙〉 「緊張のために試験室に入る前にエネルギーを消費してしまって、面接では緊張感が完全に切れていました。面接は失敗したかなと思っています。」

この後、面接の質問-回答が詳しく手紙に書かれている。質問の大部分は、現在では考えられないが、「思想信条」欄にキリスト教と書いてあったことから始まった。「キリスト者だから公務員になるのか、民間会社では人々の為にはならないと考えているのか」という意地悪な質問から始まり、「裏切られても隣人を愛するのか?」「神から報いがあるから善行を施すのか?」など、うかつに答えられない質問が繰り返されたが、幸い二次試験もパスをして公務員になる道が開かれた。

この後も手紙は続くが、札幌に慣れてしまったのか新鮮な驚きの報告はなく、つまらない手紙が多い。日記をつける習慣を持たない私にとって、半世紀以上昔の手紙は、うろ覚えの出来事の確認や当時の生活をもう一度鮮明に思い出させてくれた。捨てずに残しておいてくれた母に感謝をしたい。

学校法人草苑学園副理事長

